

編集デスク <25>

「朝日新聞」の連載小説で単行本にもなった川端康成「古都」はいささかつくりものの感じの強い小説だが、「雪国」「山の音」「千羽鶴」などと同じような系譜にある川端世界の展開された作品であることには間違いない。単行本のあと書によれば、作者川端康成は京都にあって睡眠薬を連用し、夢うつつの裡にあってこの小説を執筆したという。そのためか、のちに作者は医療を受けるために入院生活を送ったのである。

「古都」は千重子と苗子というふた子の姉妹の物語である。しかも千重子は捨子であった。運命はふた子の千重子と苗子の間をさき、現在では千重子の方が裕福な家に拾われた身分の相違がある。運命のいたずらめいたものを感じさせる。千重子と苗子は、のちに偶然の機会から相会うことになるのだが、ふたりはいっしょになれるかどうか分からない。千重子に恋する青年が、ふた子であるがゆえに千重子と苗子を間違えて苗子との接触の機会を持ち苗子に求

婚する。苗子は、その求婚が千重子への恋情の幻をおのれに見ているものだと思うから、容易には受け入れかねている。一方千重子の周囲には幼なじみと、その兄のふたりの結婚相手がいる。そのような複雑な対人関係のもつれがあるのだが、「古都」の世界はそのような人間関係のあやを秘めて、四季の京都の風物詩を背景に無心に展開されてゆく。

「古都」の冒頭は千重子が、庭にあるもみじの古木の幹に咲いた樹上二

川端康成「古都」の冒頭

——長谷川 泉——

株のすみれ花を見つける描写にはじまる。樹上二株のすみれは一尺ばかり離れている。千重子はそれを眺めながら、あのすみれの花はお互いに知っているのかしらという感慨を持つ。年ごろの千重子の多感な乙女心は、もみじの古木のごつい幹に咲いたたおやかな孤独なすみれに春のやさしいおとずれを感じ、感情の波紋を覚える。「上のすみれと下のすみれとは、会うことがあるのかしら。」

おたがいに知っているのかしら」という感慨は、ふた子の美しい姉妹が運命のいたずらによって一方は捨子され、相会うこともなく生長し、たまたま相会う機を得ても、姉妹としていっしょに暮らすことができないらしい宿命の象徴であろうか。あるいは、千重子にしても、苗子にしても、近くに結婚の相手たり得る男性があらわれながら、簡単に結婚することができないらしい運命の象徴でもあろうか。

小説であるから、樹上二株のすみれと、それへの感慨は作者の胸に宿った仮構であるが、いかにも小説的に構想され計算された冒頭であると思う。読者は冒頭を読んだだけでは、そんなことは勿論感じはしない。春のやさしさに感傷する乙女心をすなおに受けとめるだけであろう。しかし、「古都」を読み進めるにしたがって「古都」の冒頭がたくましく計算され、深い意味を持っていることに思いいたるのである。

「古都」の千重子と苗子は、ザ・ピーナッツとは違うようである。

あとがき

▽きびしい寒波の襲来でした。しかしもう新しい芽ぶきが見られ、春に向けての物みな活発な準備を進めているようです。

というわけで“新学期の準備”を企画したといえどじつげになりま

すが、希望をもって現在の人不足といわれる看護の門をおとずれる若い後進を、どう迎えるか。3先生にお願いしました。

▽NHKテレビで始まった“看護婦物語”いろいろの意味で、看護界も一般世間も注目していいところでしよう。これが良き志望者への導入門

にもなってもらいたく、看護界のP・R、理解の大きな部面を持つものにした希望を持ちますが、第1回目から翻訳の点で難があることが指摘されています。公共放送ということでもあり注文はドンドシつけて誤りはなくして行きたいものです。

(K)

原稿募集

Guide for Teachers, 教案, 臨床指導, 学生指導, 院内教育, 看護管理, 学校管理, 病棟管理, 研究その他広く看護教育, 看護管理に関する論文を募集いたします。原稿枚数は原則として400字詰15〜20枚, 締切期限は設けません。日ごろ考えておられること, 感じておられることを奮って投稿していただきたいと思います。

一看護関係 発行雑誌—

一部誌代 一年	
看護教育……(月刊)……150, ……1, 800.	
保健婦雑誌……(月刊)……150, ……1, 800.	
助産婦雑誌……(月刊)……130, ……1, 560.	
看護学雑誌……(月刊)……150, ……1, 800.	
看護教室……(月刊)……80, ……960.	
病院……(月刊)……350, ……4, 200.	

三秀舎印刷・馬場製本

担当(栗原・西村)